

親子

里親の苦悩 24時間相談

明日への一歩④

生活態度を注意すると、

里子の少年は猛然と襲いかかってきた。逃げようとしても、激しくけりつけてくる。

現在19歳の少年は当時、中学3年。あまりの暴力に育て続ける自信を失い、静岡県の男性(59)は2009年12月、児童相談所(児相)に里親圖をやめると伝え

た。

少年は父親の暴力が原因で、生まれて間もなく乳児院に預けられた。小学2年のときに、子どもに恵ま

なかった男性と妻が里子として迎え入れた。スポーツや絵が得意で、「お父さん

と慕ってくる姿に、男性は「やっと父親になれた」と喜んでた。

だが、中3になって、少年はがらりと変わった。学校で教師や同級生に暴力をふるい、自宅にも帰らなくなった。実親のいない寂しさなのか、幼い頃に虐待を受けたからなのか。里親の先輩に助言を求めた

親の先輩に助言を求めたが、「暴力が収まるのを気長に待つか、縁を切るしかない」と言われた。児相に相談しても、少年の気持ち

をくみ取ることができなかった。

「彼も、私たちも追い詰めてられた」と。男性は振り返る。

英国には、州など連携し、里親を支援する民間団体の事務所を持つ「ISPPチャイルドケア」もその一つだ。

一昨年のクリスマス、ISPPのブライアン・ピケットさんは、里親のドーン・パッチングさん(46)から相談を受けた。里子の少女が突然、自分の部屋に閉じこもり、それから1週間、何も口にせず、誰とも話さなかった。

ピケットさんは、途方に暮れるパッチングさんの自宅に駆けつけ、少女と向き合った。自らも20年以上の

*

里親経験を持つピケットさんの説得を受け、少女は部屋から出ることができた。パッチングさんは「本当に救われた」と話す。

里親相談を持つピケットさんの経験を持つピケットさんの説得を受け、少女は部屋から出ることができた。パッチングさんは「本当に救われた」と話す。

を、制

もてる

子ども

を育て

られない

子ど

もを、

を、制

もてる

子ども

を育て

られない



近況を話し合うピケットさん(中央)とパッチングさん(右) —英南部で、杉浦まり撮影

里親に預けられる子どもの多くは、実親から虐待を受けるなどして心に深い傷を負っている。暴力に訴えたり、薬物に走ったりする子もいる。ISPPでは、社会福祉士らが24時間態勢で里親の相談に応じ、心の問題を抱える子にはセラピストが治療的なケアを行う。

「里親には、いつでも相談できる相手が必要。絶対に孤立させてはならない」。ピケットさんは強調する。

欧米では「子どもには家庭が必要」との考えから、親が育てられない子どもは施設ではなく、里親に預けるのが主流だ。米国や英国では里親への委託率が7割を超える。

これに対し、日本の里親委託率は15%。3万人を超える子どもが今も乳児院や児童養護施設で暮らす。宮島清・日本社会事業大准教授は「日本では、子どもが欲しい夫婦に子どもを授ける制度のよう誤解され、実の親との関係が切れた子どもだけを預ける例が多かった。大人の事情が優先された結果だ」と見る。

日本も施設偏重の姿勢を改め、11年3月、里親に優先して預けるよう都道府県などに通知。15年度からの15年間で、里親への委託率を3割に引き上げる目標も立てた。林浩康・日本女子大教授(児童福祉学)は「今後は諸外国のように、里親を探して、里子を委託した後も、育児を支え続ける民間団体を増やす必要がある」と指摘する。

里親をやめた静岡の男性は、しばらくして助けを求めてきた少年を受け入れた。「幼い頃から息子と思ってることはできなかった」。トラブルを起したり、仕事を辞めたりと、今も悩まぬ苦労は絶えない。それでも今度こそは見放さず、自立できるまで支えていこうと心に決めている。